

[名品展によせて]

かん きょう  
漢宮の春  
—尾形深省(乾山)作 鏤絵柳図重香合—

名品展は四月六日から開催されますが、そのころは、旧暦でいいますと、三月、晩春、あるいは暮春であります。そこで、出陳品の中から、この季節にふさわしい名品を紹介することになります。

それは、江戸時代中頃の京都の陶匠、尾形深省(1663~1743)が作った『鏤絵柳図重香合』(高5.3×5.3×6.8センチ)です。これは、三段重ねの長方の合子に蓋をかぶせた焼物の香合で、香道具の聞香につかう「重香合」のかたちを模倣したものです。聞香の「重香合」というのは、普通、塗物か桑材でつくられた三重の造りで、上に香包、次に銀葉(雲母の板)二枚、下は空のままにしておき炷燵を入れます。小さな香箱です。

さて、その素地は細かな黒谷の上質の陶土で、成形し白化粧掛けし、素焼したのち、その白い地の上に鉄と呉須をまぜた鏤絵具で、四つの側面には柳図を描き、蓋甲には五言詩の一聯を書き、そして灰釉系の透明釉をかけて焼いています。ただ、重ねた段の下から二段目と三段目の底面は白化粧がそのままではかかかってはいません。各稜は鏤絵具で太い線が引かれ、それには掻き落としによる波状文が施されています。底の四隅には、聞香の重香合にはない小さな脚が付けられています。合蓋造りで、しかも三段重ねを陶器で作るには、きわめてすぐれた技術を要します。焼き上がりがあるで磁器と思えるほど硬く焼き締まっており、本窯での高火度焼成によるものと考えられます。これは小さくとも、本格的な焼物です。

さて、側面の周囲には柳の樹が柔らかな筆致で描かれています。こせこせしたところがなく、大らかで素朴な表現です。柳の幹に掻き落としとして筋目を入れて、古木の

感じをだそうとしているのはほほえましく思われます。

蓋の甲には、「花飛玉溝水、葉傍漢宮煙、乾山尚古齋、深省書」と、小さな字ですが、つよく男性的な書風で書かれています。なお「齋」と「書」の字は馴染のない文字で、異体字で書かれています。

「花は飛ぶ 玉溝の水、葉は傍る 漢宮の煙」。この花は、柳絮のことです。これはじつは花ではなく、柳の種についている綿毛です。中国では旧暦三月、晩春のころ、風が吹くと、雪のように白い柳絮が枝から離れ、飛び狂い、街はさながら花の霞につつまれます。古来、この国の人々はこれを暮春の風物詩として愛し、詩人はそれに傷春のいぶきを感じました。

その柳絮が皇居の溝水(お堀)のほとりに飛び散り、そよ風に揺れる柳の葉が漢宮にそうて煙っている。この「漢宮」とは、唐の長安の都(皇居)のことで、現在の西安市を流れる渭水の北に漢の都の長安があったことから、このように呼ばれました。この言葉には、いにしへの王朝への深い想いが込められているのです。

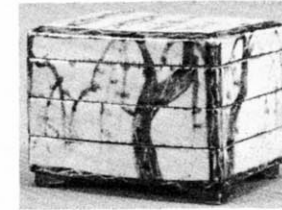
この深省の詩は、李白の詩『折楊柳』に典拠があります。「垂楊折灤水、揚艷東風年、花明玉関雪、葉暖金窓煙、(略)」。しなだれた柳条は清らかな水面を柳で、春風に暖めかしく揺れる。柳絮は明るく玉関の白い雪のよう、柳の葉は暖かく黄金飾りの窓辺の薄もやのようだ。「折楊柳」とは、旅立つ人を見送るときに、柳の枝を折ってはなむけとする風習をいいます。柳の枝はしなやかでもとへ返るので、「帰る」にかけていわれているといわれています。この風習は漢代に始ま



鏤絵柳図重香合 (蓋表)



同 (側面1)



同 (側面2)

ったといわれています。

深省の詩は、李白の詩からだけではなく別の詩からも典拠があると思われます。それは同じく盛唐の詩人韓翃の『寒食』(『三体詩』)という詩です。「春城無処不飛花、寒食東風御柳斜、日暮漢宮伝蠟燭、青煙散入五侯家」。春分より十五日目を清明節といいますが、その前日を「寒食」といいます。太陽暦で四月三日前後、旧暦では三月の中旬に入る頃、晩春です。この日は火を用いることを禁じられ、冷たいものを食べます。この詩は、寒食の日に、長安の都のいたるところでは柳絮が飛び、宮殿のほとりの柳は日暮の春風にそよいでいる、晩春落花の情景を詠っています。

深省の詩句はわずか五言一聯ですが、漢詩をふまえて自己の内奥の古典世界への憧憬と夢想とを表現しているといえます。

さて、「乾山尚古齋」とは、元禄十二年(1699)、深省三十七歳のとき、京都の西北(乾の方角)にある鳴滝泉谷の地に隠棲したその住居の名前です。彼は十三年間ここに住み、数々の名作を生み、正徳二年(1712)、五十歳のとき、乾山寮を廃し、閑居を切上げて、洛中の二条丁子屋町に移ります。

「鏤絵柳図重香合」の底裏は白化粧のまま無釉で、鏤絵具で「正徳年製」の銘が書かれています。つまり、この銘によって、この香合が、鳴滝時代最末期の正徳元年から二年にかけてのころに作られたということがわかります。

ところで、この重香合を見ますと、これが大変シャレた意匠をしていることに気づきました。前に述べましたように、これは香

道具の重香合を模倣したもので、それ自身が「漢宮」を立体的に見立てたものであり、柳図はそれを回る楊柳であるわけで、稜線の波状文は、春風に波立つ溝水を暗示しているのです。そして白地は正に柳絮の白い花でけむる都の春霞を表しているのです。また香りを包み込むというところに、後宮の内の艶めかしい雰囲気も想像させられます。

と、ここまでは誰でも気づきます。深省の意匠はじつはそれだけではないのです。というのは、側面の回りの柳を数えますと、五本あります。五本の柳の樹とくれば、五柳先生、すなわち晋時代の隠遁詩人陶淵明(365~427)その人のことが想起されます。自伝『五柳先生伝』によりますと、「宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す」とあります。深省は若いころ、この詩人に憧れて、御室に「習静堂」を構えて、隠遁者の真似ごとをしたくらいです。ですから、五本の柳の画には、深省の特別な想いがあるにちがひありません。

とすると、ここで、あの「漢宮」は一変して、陶淵明の貧乏住いの「草堂」に変わります。この「みやび」から「わび」への変化、落差(やつし)は、見事というしかありません。艶隠者深省の詫住いの裡にも、どうもほのかな色香が漂っているようです。このエロチズムは深省の資質であるとともに、これは師匠の陶工仁清、そしてその師匠である茶人金森宗和の「姫わび」の美意識を継承しているのです。

この「鏤絵柳図重香合」は、深省の「遅い青春の別れ」をうたいあげたものではないでしょうか。

(林進)

季刊 美のたより No.86

平成元年 2月 25日

発行 大和文華館